- 透析期腎性貧血治療戦略　～エベレンゾを使いこなす～

東京女子医科大学血液浄化療法科　土谷　健

＜抄録＞　学会指定　400 字～800 字

2019 年にエベレンゾ錠が日本で初めて HIF-PH 阻害薬として承認されて以来、合計 5 剤が発売され、腎性貧血治療の選択肢が大きく広がった。特に経口剤であるという特徴を背景に、保存期 CKD に伴う腎性貧血治療において HIF-PH 阻害薬は拡大を続けている。

一方で、経口剤という点が大きなメリットとならない透析期腎性貧血治療において、いまだに明確な ESA と HIF-PH 阻害薬の処方基準は無く、ESA が広く処方されている。HIF-PH 阻害薬は“経口のエリスロポエチン製剤”ではなく、低酸素応答を介した内因性の EPO 産生促進という作用機序から生理的な EPO 濃度による Hb 値改善が期待されている。また、ヘプシジン産生抑制を介した鉄利用亢進作用も有しており、外因性 EPO 補充の ESA とは異なる作用を有することが確認されている。

本邦の透析患者の高齢化は周知のことであり、本研究会の命題とするところであるが、高齢者特有の炎症反応陽性や高ヘプシジン血症などにより ESA 反応抵抗性、機能的鉄欠乏がしばし経験される。これに対して HIF-PH 阻害薬がいかなる効果をもたらすか、多いに期待される。

　これらの HIF-PH 阻害薬の機序から考えられる ESA との違いが、実際の透析期腎性貧血治療にはどのように反映されるのか、どのように HIF-PH 阻害薬を使っていけば良いかという点をエベレンゾのエビデンスを中心に考察していきたい。　（595 文字）